

項目	自己評価	中・長期経営目標	短期経営目標	主な取組内容	取組内容の評価指標	達成状況	改善方策	学校関係者評価	学校関係者評価	
確かな学力	B	○全国水準の学力を付ける ※全国学力・学習状況調査の全国平均+5ポイント ※高知県学力定着状況調査の県平均と同等以上	●「分かる」授業づくりを通して、基礎・基本の確実な定着や学習意欲の向上、望ましい学習習慣の確立を図る。 ●「舟入小授業スタンダード」に即した問題解決型学習の授業を行う。 ●個に応じた補充的学習や予習・復習の課題提示、自主学習の奨励により、家庭学習の習慣化など望ましい学習環境の整備を行う。 ●読書を通して、豊かな感性や情操、知識、表現力や想像力の育成を図る。	○学力向上のための組織的な校内研修体制づくり ○子どもにわかる授業づくり	○研究推進部会からの提案を皆で協議し、教職員全員が研究実践の方向性を一致させる。 ○取組の成果と課題を検証し、日々の授業改善に生かす。 ○学習の見通しをもたせる「ユニバーサルデザイン」の実践に取り組む。 ○授業の中で、児童が学び合い、伝え合う活動を大切に。特に、根拠や理由を述べる機会を保障したり、場の工夫をしたりすることで、「話す力・書く力」などの表現力を育てる。	・学期末に、各部会が組織体制や活動内容等について評価を行う。(各部とも肯定的評価90%以上) ・学校評価アンケートにおいて ※「授業が分かる」95%以上 ・単元テスト結果の平均90%以上 ・講師招聘校内研修会(年3回)	東部教育事務所による「チーム学校構築」のチェックシートにおいて、自己評定レベルが2.7であった(目標レベル4)。各部会とも実践は行っているが、チーム学校としての実践に弱さがあった。特に研究実践の成果と課題をどのように検証し、次につないでいくのかが明確になっていなかった。 ※高知県版学力調査 4年 国語 63.8(-2.5) 算数 46.3(-5.6) 5年 国語 71.4(-1.6) 算数 54.1(-2.7) 理科 56.9(-3.1) いくつかの条件のもと、説明したり、自分の考えを書いたりすることに課題が残っている。 児童の意識調査によると、「国語・算数の授業が分かる」と答えた児童は85.4%になっている。	「チーム学校」として今何を求められているのかについて共通確認して、目標レベル4を達成する。 各研究部会がPDCAサイクルを確実に回していく。 「舟入小学校の授業スタンダード」に基づく授業はできてきているので、問題解決型の授業を意識した授業づくりをしていく。 授業の中で、理由や根拠を説明したり、書いたりする場面を設定した授業構成を行っていく。	標準学力調査について4月に比べて12月の結果が全体的に落ちてきているのが心配だ。「授業が分かる」と答えた児童の割合が調査結果につながっていないのはどうしてだろうか。ただ、児童数も減っているのだから、結果の数値にとらわれるのもどうだろうか。 学力調査等の結果とこれからの授業を意図して授業づくりをしていく。「探究」で身に付く数値には表れない学力を教員がどのように評価をしていくかの研究も必要ではないか。長い目で見ると、経験や体験を通して身に付けられる力を評価していくことも大切だと思う。 「チーム学校」として共通確認しながら、日々の教育活動にあたってもらいたい。	B
			○学校全体で予習・復習(宿題)の質と量が高める取組	○放課後子ども教室等や「家庭学習の手引き」を活用した家庭学習シュミレーションを行い、家庭学習の習慣化を図る。 ※「学年×10分+10分」以上の家庭学習時間の達成 ○朝読書の実施(外部ボランティアの協力による「朝の読み聞かせ」「昼のお話の部屋」を含む)し、家庭読書の習慣化や学習に応じた本選びや並行読書に取り組むことで、読書に親しむ態度を育て、読書の習慣化を図る。	・家庭学習の定着90%以上 ・家庭学習時間の達成80%以上 ・各学年の読書目標冊数達成率80%以上 (「朝の読み聞かせ」「昼のお話の部屋」を隔週木曜日に開催)	家庭学習時間の目標達成率は全校平均で74.6%に留まり、目標値には届かなかった。「家庭学習の手引き」は配布したものの、家庭学習シュミレーションを行うことができなかった。 読書活動に関しては、目標値を越えることができた。「読み聞かせ」や「お話の部屋」の取組で、児童が本に親しむ環境づくりはできている。	家庭学習については、「学習の手引き」を利用した家庭学習シュミレーションを実践していく。次の授業に生かせるような課題の出し方についても議論していく。 読書活動については、「読み聞かせ」「お話の部屋」を継続してお願いしていきたい。			
			○思いやりの心や、よりよい生活を送ろうとする態度を育てる	●道徳教育の重点目標を「個性の伸長」「相互理解、寛容」「よりよい学校生活、集団生活の充実」に設定する。児童が主体的に考え、友達とともに思いや考えを伝え合い、学び合う中で、道徳的価値に気付き、実践に結び付けていくことができるような効果的な指導方法や評価の在り方の研究を通して、道徳性を育む。	○道徳科の趣旨を踏まえた授業実践の研究を通して、よりよく生きていくことのできる力(道徳性)を育てる。 ○道徳参観日の実施や道徳だよりの発行、「高知の道徳」の活用などを通して、家庭・地域と連携した道徳教育を進めることで道徳実践の育成を図る。 ○全教職員が日々の生活や学習、清掃、当番、委員会活動等において児童の頑張りを積極的に認め、称賛する取組を進めることで、仲間意識の高揚や自己肯定感の育成につなげる。 ○特別活動や委員会等を活用して、児童同士の関わりを盛んにさせる。	・道徳の公開授業を年7回実施 ・道徳意識調査において ※「自分にはよいところがある」83%以上 ※「人が困っているときは進んで助けている」83%以上 ※「学校のきまりを守っている」83%以上 ・Q-Uアンケートにおいて ※「学級生活意欲点」32/36(全学年平均) ※「学校生活満足群」67以上 ・長期欠席児童出現率(0%)、いじめを認知した場合の解決率100%	道徳意識調査では、ほぼ目標値は達成している。ただ、自己肯定感については若干低い結果となっている。 30日以上長期欠席児童は3名(出現率2.7%)、いじめの解決率は、経過観察期間があるため、100%にはなっていないが、いじめの事象自体はほぼ解決に至っている。	児童の実態に即して、道徳教育の重点目標を再確認し、道徳の授業はもちろん日常生活の場を通して、児童の道徳性を育てていく。 不登校については、関係機関とも連携し、出現率0を目指していく。 いじめについては、校内委員会等を活用して、情報収集に努め、未然防止に努める。	道徳の授業は素晴らしい。この取組を継続していけば、大人になっていくにつれて値打ちとして出てくるのではないかと感じている。道徳だよりが楽しみである。 縦割り班活動を通して子供たちの仲のよさが窺い知れる。子供たちは素直なので、考えたことや思ったことをしっかりとと言える子供に育ててほしい。 規範意識については、どんなきまりが守れてないか探る必要もあるのではないかと感じる。	
○体力や運動能力の向上を目指し、生活習慣の定着に向けて取り組む力を育てる	●授業や体育的行事、日常の遊び等を通して、積極的に運動に親しむ態度や運動能力の向上を図る。 ●児童一人一人が健康や安全に関心をもち、望ましい生活習慣の確立や体づくり、安全管理に励むような指導の工夫に取り組む。	○副読本「わたしたちの体育」を活用した授業実践に取り組む。 ○朝の会等での簡単なストレッチ運動や筋力運動、業間体育など継続的に実施することで、運動に親しむ機会や運動量の確保に努め、運動能力や体力の向上につなげる。 ○防災学習、避難訓練、交通安全教室等を通して、安心・安全な生活・行動について理解させ、危険を回避する力を身に付けさせる。	・授業での「体力アップ75」の活用100% ・副読本「わたしたちの体育」の活用100% ・生活リズム名人を年3回実施 ・防災学習を年5時間以上、避難訓練を年3回 ・自転車ヘルメットの着用100%	児童が運動に親しんでいけるような取組は行えた。 生活リズム調査は毎学期実施できた。課題としては、寝る時間の達成率が低くなっている。調査項目には入っていないが、ゲームやラインなどの影響があるとと思われる。 防災学習については、高知河川国道事務所と連携した「水防」の学習ができた。校区内の危険箇所については、行政と連携した対応を行っている。	体力向上については、日常の仕掛けも大切ではあるが、運動量が確保できた体育の授業を意識して取り組んでいく必要がある。 ゲームやSNSなどネット社会に飲み込まれないような保護者向けの啓発活動に取り組んでいく。 学校安全については、様々な場面を想定した避難訓練を関係機関と連携しながら進めていく。	ゲームやSNSの問題は本来は家庭の問題ではないかと感じる。朝食の大切さなども含めて、学校からの情報提供などの啓発活動を通して、家庭に力を入れてもらうべきではないかと感じる。 「水防」の学習は舟入校区にとっては欠かせない学習だと思うので、よかった。さらに充実させていってほしい。	A			
○保護者や地域と連携し信頼される学校づくりを目指す	●保護者や地域の方々の学校教育への理解、協力を求めるための開かれた学校づくりを推進する。 ●地域学校協働本部等との連携を深めことにより、保護者や地域の方々が持つ教育資源を積極的に活用させていただく。	○保護者・地域の方々と連携を深め、教育活動についての意見や要望を学校経営に反映させるなど、相互の信頼関係に基づく「開かれた学校づくり」を進める。 ○学校・PTAだよりやホームページ等を活用し、学校や子供たちの様子、PTA活動を伝える。 ○舟入小学校運営協議会を定期に開催、進捗状況の確認を行う。	・学校評価アンケートにおいて ※「保護者・地域の声を反映」90%以上 ※「積極的な情報提供」90%以上 ・学校だより、PTAだよりの発行(月1回) ・ホームページへの活動の掲載(月2回) ・eメッセージの発信(適宜)	「保護者・地域の声を反映」「積極的な情報提供」では、ともに73.5%という結果になった。特に情報提供については、不十分であった。 地域学校協働本部の活動は活発に行われた。学校と地域の橋渡し役としてのお二人の地域コーディネーターによって支えられてきた。子どもたちのためにと、多くの地域の方に協力いただき、充実した学習活動を行うことができた。	情報提供については、ホームページやおたよりなどをより効果的に活用していく。 学校の計画不足で地域の方に多くの負担をかけてしまったので、教育活動全体を見直しながら、協力をお願いしていく。	近所のおつき合いなど地域の特長がよく出ている学校だと思う。 学校の取組には地域の方も大変満足されている。CSとして積極的に協力もしていきたいし、誘いの声も増えていくようにしていきたい。 情報発信のツールとして学校のホームページをもっと効果的に活用していけばよいと思う。		A		
○児童一人一人を大切に特別支援教育を行うと共に交流学習を通して児童に社会性を育む	●支援を要する児童への理解を深め、合理的配慮、支援方法の工夫に取り組む。 ●交流活動(特別支援学級・特別支援学校・就学前との交流活動)を通して、社会性の育成を図る。	○特別支援教育コーディネーターを中心とした校内支援体制を機能させ、関係機関との連携の基、一人一人の特性と発達段階に応じた適切な支援の充実を努める。 ○ユニバーサルデザインに基づく授業づくり、環境づくりの研究、実践に取り組む。 ○交流活動における実施・検証・改善のサイクル化を図る。	・支援会や校内委員会等を計画的に開催 ・講師招聘研修会を年3回以上実施 ・交流活動の検証・改善の実施	校内委員会を効果的に活用した特別な支援を要する児童への支援体制が構築できなかった。市の支援会は予定通り実施できたが、支援会を受けて誰が何をいつまでにするのか、どう検証するのかが不十分であった。 山田特別支援学校との交流活動はほぼ予定通りに行えた。	来年度は自閉・情緒特別支援学級が8人1クラスの編制となる。通常の学級にも医療的な診断を受けていたり、発達障害が疑われる児童も増える傾向がある。特別支援コーディネーターを中心にしながら、支援体制を構築していきたい。 ユニバーサルデザインの授業づくりを研究し、児童が安心して授業に向かえる体制を作っていく。	長年続けている山田特別支援学校との交流活動は素晴らしい。また、児童理解という意味でなくよき保育園との交流も評価できる。 自閉・情緒学級の状況は大変心配。また、授業に集中できなかったり、クールダウンの必要な児童への手立てにも苦労がうかがえる。支援体制づくりをお願いしたい。			B	